



## 安室 知

はじめに

- ①水田養鯉を取り巻く環境
- ②水田養鯉の基本
- ③コイの成長と呼称の変化
- ④コイの養成段階と水田・イケの使い分け
- ⑤後発地にみる成長段階名
- ⑥成長段階名の発生
- ⑦成長段階名にみる汎用技術と在地技術
- ⑧成長段階名にみる民俗分類の思考

### 【本文要目】

人が動物を眺めるとき、そのまなざしは多様である。なかでも、分類と命名のあり方は、もっともストレートに、人が動物をいかに認識してきたかを表す。ここでは、近代に盛んにおこなわれた水田養鯉に注目し、コイに対する分類・命名のあり方から、日本人と動物との関係性について検討していくこととする。

ブリやボラといったいわゆる出世魚の成長段階名とコイの成長段階名との大きな違いは、そこにドメスティケーションという人間側からの働きかけが存在するかどうかということにある。コイの成長段階名は、あきらかに養殖によって生み出されたものである。コイは3年間に及ぶ継続的な飼養の中から、コイゴ→トウザイ→チューッパ→キリという4段階に及ぶ成長段階名が生み出されている。養魚技術が高度化すること、つまりコイに対する管理がより精緻でかつ長期にわたってなされるとともに、人のコイに対する認識はきめ細かなものとなり、結果として成長段階名も増加することになったといえよう。

コイの場合、個々の成長段階名を検討してみると、コイゴおよびトウザイという初期の成長段階はいわば時間概念で割り切れる分類であるのに対して、成長の最終段階であるキリは明らかに魚体の質量によって決められていることがわかる。一見すると、分類基準として時間と質量という二つの概念が錯綜しているかのように見えるが、農家が養魚をおこなう上では矛盾なくかえて実用的なものとなっている。また、そのときチューッパの位置がとくに重要な意味を持っていることに気が付く。農家がおこなう養殖技術においてチューッパ段階は種々の調整段階となり、そのことにより時間の概念から質量の概念へと転換していく、ちょうどその結節点となっているからである。